

01	名古屋	富士見台小学校	カワセ リノ
			名前 川瀬 理乃
分科会番号	8	分科会名	音楽教育

研究題目 自分の思いを表現することができる子どもたちを目指して

研究要項

1 研究のねらい

私は、自分の思いを表現することができる子どもたちを育てたい。自分の思いを表現することができる子どもとは、「元気で明るい感じに演奏したい」と、その曲のよさや特徴から自分の思いを、演奏で表現できることだと考える。

本学級の子どもたちは、音楽の授業で歌を歌うとき、元気な曲では体を揺らしながら笑顔で歌う様子が見られ、曲のよさや特徴を感じ取りながら表現することができている。しかし、2年生の鍵盤ハーモニカについて聞くと、「指使いが分からなくて難しかった」「鍵盤ハーモニカを演奏するのは楽しくなかった」と、歌唱とは対照的な答えが返ってきた。器楽の難しさである指使いでつまづいてしまうと、「楽器を演奏することは楽しくない」という思いが大きくなってしまい、楽器を使って自分の思いを表現することは難しくなってしまうのではないかと考えた。そして、3年生から新しく学習するリコーダーに対しては、鍵盤ハーモニカで抱いたような苦手意識をもたず、学習のスタートから楽しいと感じられるようにしたいと思った。

そこで本研究では、指使いや息の使い方などの演奏する上で大切な技能を身に付け、自信をもって演奏できるようにすることで、子どもたちが歌だけでなく、楽器でも自分の思いを表現することのよさや喜びを感じられるようにしたいと考える。そのために、「やってみたい！自分もできそう！」と思えるためのリコーダーとの出会いの場や、自信をもって演奏することができるようにするために「できた！」を積み重ねることができる場の工夫をすることで、自分の思いを表現することができる子どもたちの育成に迫りたい。

2 研究の構想

(1) **研究の対象** 名古屋市立富士見台小学校3年1組（34人）

(2) **研究の手立て**

手立て①【きいて！見て！ゲット！】「やってみたい！自分もできそう！」と思えるための場の工夫

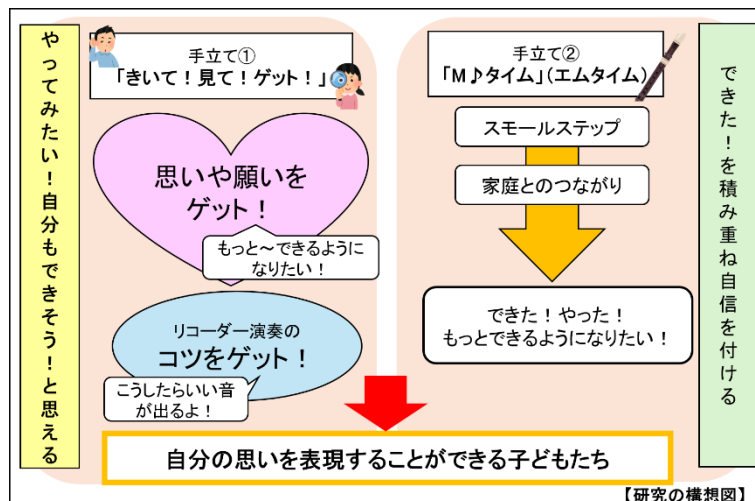
- ① 「どんな楽器？」では、単元の導入でプロの笛奏者と出合わせ、様々な大きさのリコーダーを使った演奏や、アニメの主題歌の演奏を聴かせる。そうすることで、想像を超える演奏に感動したり、リコーダーでも自分が知っている有名な楽曲を演奏できることに気付いたりすることができ、「やってみたい！」という気持ちを高めることができるようになると思う。
- ② 「この音、出せる？」では、教師が吹くリコーダーの音は、どう穴をふさぐと同じ音が出るのかを予想するクイズを行う。そうすることで、ふさぐ穴やふさぎ方を変えると簡単に音や音色が変わることに気付く、「自分にもリコーダーの演奏ができそうだ」という思いをもつことができるようになると思う。
- ③ 「二つの吹き方どう違う？」では、教師の範奏を聴き比べることで「こっちの演奏の方がいい音だ。穴のふさぎ方に違いがあるから、指はこうするといい音になるんだ」と、リコーダー演奏のコツを、子どもたちが表出（ゲット！）できるようにする。コツが分かることで、子どもたち

は「このコツを意識すれば自分もいい音が出せそう！」とすることができるようになると思う。

手立て②【M（エム）♪タイム】できた！を積み重ね、自信を付けるための場の工夫

子どもたちが「㊦っと！」という前向きな思いや願いをもって、「㊦ュージック♪」の楽しさを味わうことができる場にしたいという思いから、頭文字をとって「M（エム）♪タイム」と名付けた。M♪タイムでは、スモールステップでの練習の場と家庭とのつながりの場の二つを設け、子どもたちが段階を踏まえながら上達したり、自分のペースで練習したりできる工夫をすることで、「できた！やった！」を繰り返し、自信をもってリコーダーを演奏できるようにしていく。

(3) 研究の構想図



3 研究の内容【実践1】

題材 こんにちは リコーダー

(1) ねらい

初めて出会う楽器、リコーダーに興味や関心をもち、「自分も演奏してみたい」「もっとできるようにになりたい」という思いをもつことができるようにする。また、リコーダーの演奏のよさや面白さを感じ取り、奏法に気を付けて演奏したり、味わって聴いたりすることができるようにする。

(2) 実践の経過

手立て①【きいて！見て！ゲット！】やってみたい！自分もできそう！と思えるための場の工夫

①リコーダーとの出会い「どんな楽器？」

子どもたちの目がきらきらと輝くようなリコーダーとの初めての出会いを味わってほしいと考え、ゲストティーチャーに笛奏者を招いた。子どもたちは前のめりになって演奏を聴いたり見たりしていた。初めてリコーダーの音色を聴いた子どもたちは、「すごい！」「きれいな音だ！」と目を輝かせていた。また、子どもたちに親しみのあるアニメの主題歌をリコーダーだけで演奏されるのを聴いて、「リコーダーだけでこんな風に演奏できるんだ！」「リコーダーって面白そう！」と、これから始まるリコーダー学習への期待でいっぱいの子どもの姿があった。

②音との出会い「この音、出せる？」

子どもたちに「先生と同じこの音出せる？」と、教師の指使いが分からないように隠れて、シの音を演奏した。子どもたちは、リコーダーの音しかヒントがない中、同じ音を出すにはどの穴をふさげばよいのかを、試しながら見付けていった。「少しふさぐ穴が変わるだけなのに、音が変わるのが面白い！」「シの音は簡単に出せた！リコーダーって音を出すの簡単だね！」と、リ

コーダーに対して「自分もできそう」と思っている姿が見られた。

③押さえ方との出会い「二つの吹き方どう違う？」

「どっちの演奏がいい音かな？」と伝えてから教師が範奏をした。範奏を聴いた子どもたちは、「指で穴をしっかりと押さえている方がいい音だ」と、近くの友達に伝え合う姿が見られた。その後、ペアになって穴をしっかりと押さえながら吹き合った。すると、「ソの音は薬指をしっかりと押さえるといい音だったよ」と、自分が気付いたコツを友達に伝えることができていた。また、「コツを意識して吹いたら、簡単にきれいな音が出たよ！」と、子どもたちは手応えを感じている様子だった。一人ひとりがゲットしたコツはクラスで共有する場を設け、共有後は教室に掲示し、授業の度に思い返すことができるようにした。

手立て②【Mタイム】できた！を積み重ね、自信を付けるための場の工夫

①スモールステップで「できた！」

【先生と一緒に！】

子どもたちの「できた！」を積み重ねることができるよう、スモールステップで練習を進めた。教師の範奏を聴き、1音、1小節、1段、1曲と、少しずつ真似をしながら演奏していくうちに「最後までできた！」と、できたを実感する子どもたちが多く見られた。

【友達と一緒に！】

毎授業の始めに、リコーダーを持つ正しい姿勢を友達同士でチェックし合ったり、タンギングのトゥーだけで言葉を作り、友達同士で真似をしながら演奏したりする活動を行った。子どもたちは、「始めは音を出すだけで精一杯だったけど、今はタンギングをしながら長い言葉の演奏ができるようになった！」「友達が教えてくれてきれいな音で吹けた！」と、うれしそうな姿が見られた。

②家庭とのつながりで「できた！」

子どもたちの「家でも練習してみたい！お家の人に聴いてもらいたい！」という思いから、「お家でリコーダーチャレンジカード」を用意し、授業時間での練習だけでなく、家庭とのつながりをもたせ、保護者にも応援してもらうことで、子どもたちが自信をもって演奏できるようになることを目指した。家庭で練習に取り組んだ翌日、ある子どもが「頑張って練習したら、お母さんに褒めてもらえたよ！先生聴いて！」と、自信をもった表情で伝えに来た。演奏を聴くと、とてもきれいな音で最後まですらすらと演奏しており、上達を感じられた。家でどのように練習をしたのかを聞くと、「いつも間違えてしまうところは、ゆっくり何回もやったらできるようになったよ」と答えた。全体では出来ないことでも、家庭で自分のペースで練習に取り組むことで、「できた！」を積み重ねることができたのだと感じた。

できるようになったこと	おうちの人から
レツポソレーを、何回もやったら、上手にできるようになりました。	イタリキルとキルって、ね。レツポソレーも練習するから、イタリキルとキルって、ね。
21ばんのサランドレーを3回やってしまったけれど、お母さんに褒められました。まちがえなしでできるようになった。	最後のレツポソレーが、難しかったけど、練習で上手にやりました。お母さん、褒めてくれました。

【お家でリコーダーチャレンジカード】

(3) 成果と課題

手立て①【聞いて！見て！ゲット！】やってみたい！自分もできそう！と思えるための場の工夫

- プロの笛奏者との出会いや、音を使ったクイズなど、子どもたちがリコーダーに興味や関心をもったり、身近に感じたりすることができる工夫をしたことで、リコーダーに対して「やってみたい！」「自分もできそう！」という思いをもつことができた。

- 範奏を聴いたり、コツをゲットしたりしたときには、主体的な気持ちをもつことができていても、時間が経つとその思いや願い・コツを忘れてしまったことで、「やってみたい!」「自分もできそう!」という思いが薄れてしまった子どもが見られた。

手立て②【M♪タイム】できた!を積み重ね、自信を付けるための場の工夫

- 「お家でリコーダーチャレンジカード」を活用し、家庭でも練習する場を設けたことで、自分のペースで何度も練習をしたり、保護者から応援のメッセージをもらったりすることができた。そうすることで、「学校では出来なかったことが、家で練習してみたらできるようになった」と、「できた!」を積み重ねることができた。その結果、子どもたちは「自分の演奏、聴いて!」と、自信をもって演奏することができるようになった。
- 主体的に取り組んでいるが、実際の演奏では、タンギングもままならず、弱々しい音しか出すことができていない子どもがいた。これは、自分の上手くいっていないところや、それを克服するための練習方法が分かっていないことが原因だと考える。その結果、「できた!」を積み重ねるつもりが、本当の「できた!」になっていなかったのだと思う。

(4) 実践2に向けて

実践2では、「こうやって練習すれば～ができるようになる」と、どうしたら「できた!」を積み重ねていけるのかが分かるように工夫をしていく。

手立て①「きいて!見て!ゲット!」では、ゲットした思いや願い・演奏のコツを書き貯め、形に残るようにしていくことで、「やってみたい!」「自分もできそう!」という思いをもち続けることができるようにしていく。

手立て②「M♪タイム」では、子どもの演奏に対して、保護者や教師、友達がアドバイスをすることで、自分が上手くいっていないところを自覚できるようにしていきたい。次に、子どもの実態から6つの練習コースを提示し、その中から自分に合った方法を選び、取り組むことで、「こうすればできるかも」という思いをもって練習することができ、「できた!」を積み重ねることにつながると考える。

さらに、練習の手順やポイントを示したカードを準備し、どのように練習したらよいか、迷わず取り掛かることができるようにしていく。そうすることで、着実に「できた!」を積み重ね、自信をもってリコーダーを演奏できるようにしていきたいと考える。

4 研究の内容【実践2】

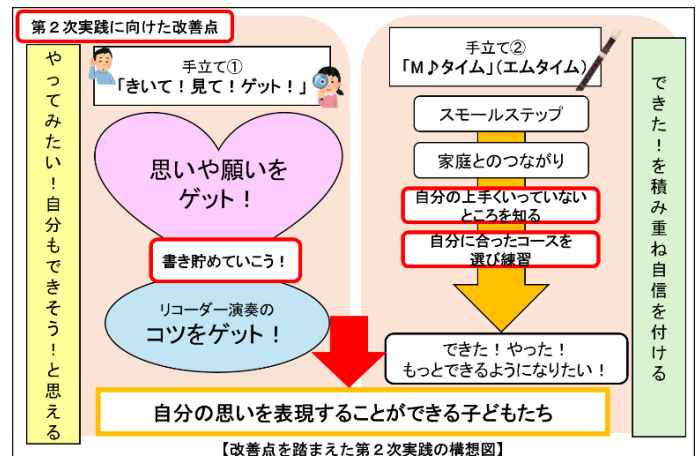
題材 めざせ楽器名人 教材「レッツゴーソーレー」

(1) ねらい

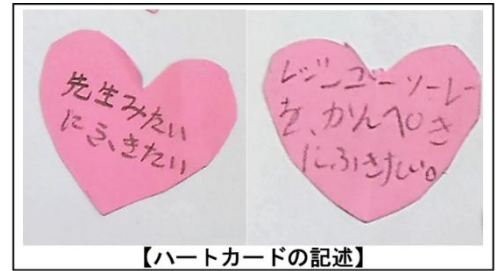
自分に合った練習方法を選び、音色や奏法に気を付けながら、自信をもって演奏することができるようにする。また、同じリズムで音が重なり合ったり、同じ旋律を繰り返したりする曲の面白さを生かしてタンギングを確かめながら演奏できるようにする。

(2) 実践の経過

手立て①【きいて!見て!ゲット!】やってみたい!自分もできそう!と思えるための場の工夫

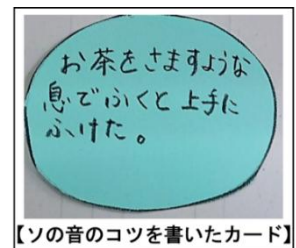


子どもたちの思いや願い・演奏のコツを書き貯めるために、思いや願いを書く「ハートカード」と、演奏のコツを書く「コツカード」を用意した。「レッツゴーソーレー」という曲に初めて出会う子どもたち。「今から先生がリコーダーコンサートをするよ」と伝え、子どもたちは背筋を伸ばして範奏を聴いていた。二つのパートの掛け合いの部分は、録音したもう片方のパートに合わせて演奏した。子どもたちは、「先生みたいに演奏できるようになりたい」「パートが分かれる難しい曲だけど、がんばってチャレンジしたい」と、自分の思いや願いをハートカードに書いた。



【ハートカードの記述】

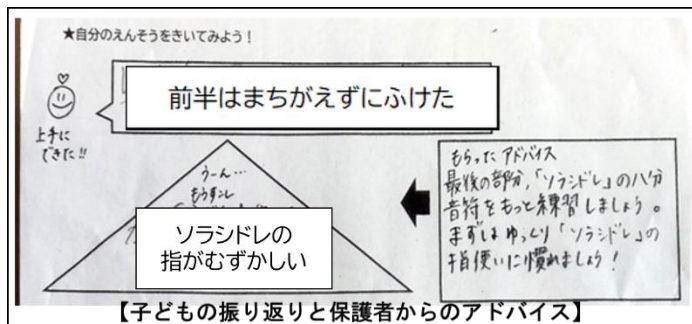
その後、ペアで曲の練習をする時間に、ソの音が上手く出せなかった子どもがペアの友達から「ソの音は息をあたたく入れるといいよ」とアドバイスをもらっていた。そのアドバイスを基に何度も練習すると、「先生！一番きれいなソの音が出たよ！」と、とてもうれしそうだった。この子どものコツカードには、「ソの音はお茶をさますような息でふくと上手にふけた」と書かれていた。そして、ソの音が出てくる度にこのコツカードを確認する姿が見られた。



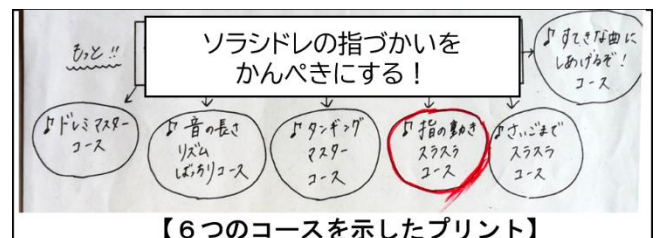
【ソの音のコツを書いたカード】

手立て②【Mタイム】できた！を積み重ね、自信を付けるための場の工夫

子どもの演奏を聴いて、保護者にアドバイスをしてもらおう場を設けた。まずは、子ども自身が自分の演奏で上手にできたところ、もう少し頑張りたいところをプリントに記入した。その後、保護者にアドバイスを書いてもらった。このアドバイスや自分自身での振り返り、教師からのアドバイスを基に次の目標を設定し、その目標を達成するために必要な練習コースを選び、練習を進められるようにした。



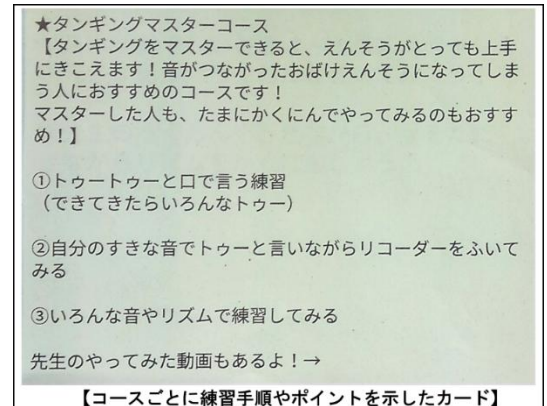
【子どもの振り返りと保護者からのアドバイス】



【6つのコースを示したプリント】

子どもたちが、「どうしたら自分の上手いかわからないところができるようになるのか」を分かった状態で練習を進めることができるようにするために、コースごとに練習のポイントカードを配付した。このポイントに沿って「タンギングが苦手だから、まずは口で言う練習からやってみよう」や「タンギングができているか不安なときは、この練習もやってみよう」と、自分に合った練習を進めることができていた。

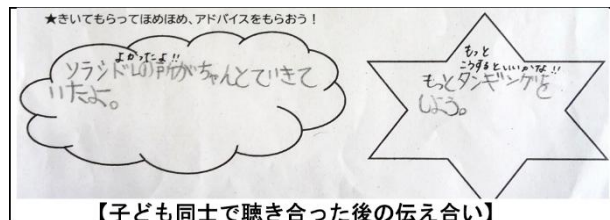
また、タブレットでリズムや指使いを確認できる動画を配信し、何度でも確認しながら練習ができるようにした。すると、「指やリズムが途中で分からなくなってしまう」と、指の動きスラスラコースを選んでいて子が、「最後のリズムが難しいからもう一度動画で聴いてみよう」と、練習に



【コースごとに練習手順やポイントを示したカード】

取り組みながら着実に「できた」を積み重ねることができていた。その後、この子どもは、「一度も間違えずにできた！」と自信をもって演奏する姿が見られた。

練習の後に「今日の本番タイム」を設け、ペアの友達に演奏を聴いてもらい、ほめほめコメントともっとよくなるポイントを伝え合った。自分の演奏を褒めてもらえた子どもたちは自信に満ちた表情だった。また、友達からのアドバイスから「次はタンギングの練習をもっと頑張ろう」と、次に向けて目標を立てることができていた。



(3) 成果と課題

手立て①【きいて！見て！ゲット！】やってみたい！自分もできそう！と思えるための場の工夫

- 範奏を聴いた後に思いや願いをハートカードに書く場を設けたことで、子どもたちの「こんな風に演奏できるようになりたい」「頑張ってチャレンジしたい」という思いを、練習中いつでも子どもが確認でき、最後までその思いをもって取り組むことができた。
- カードを書くことに時間が掛かってしまい、演奏の時間が減ってしまった。簡単に書くことができるものや、タブレットの活用も考えていきたい。

手立て②【M♪タイム】できた！を積み重ね、自信を付けるための場の工夫

- 保護者や教師、友達が演奏にアドバイスをしたことで、子どもが自分の演奏のよかったところや上手くいっていないところに気付き、それを基に自分に合った方法で夢中になって練習に取り組む、着実に「できた！」を積み重ねることができた。
- 演奏があまり変わってなくても、次の段階のコースに進む子どもがいた。自分で自分の演奏を正しく振り返ったり、授業での練習でも教師が演奏を聴いてアドバイスができる場を設定したりする必要があると感じた。

5 研究のまとめ

本研究では、自分の思いを表現することができる子どもの育成を目指し、実践を行った。3年生というリコーダー学習の土台となる学年のため、子どもたちが「リコーダーって楽しい！得意かもしれない！」と思えることに重きを置いた。子どもたちは、「やってみたい」「自分もできそう」という思いをもってリコーダーに向き合い、着実に「できた！」を積み重ねることで、「この曲、速くて難しいけど元気にかっこよく吹けるから楽しい！」と、リコーダーで表現することの喜びを感じることができていた。

4月は落ち着いて音楽の授業を受けることが難しかったある子が、実践を終えた頃には、「教室だとみんなの音で自分の音が聴きづらいから、教室の外で吹きたい！」と、自分の思いを表現するために、根気強く練習する姿が見られるようになった。家庭でも保護者に応援してもらいながら、毎日のように録音した演奏を聴かせてくれた。この子どもだけでなく、本学級の子どもたちは、リコーダーが大好きだ。3年生最後の修了式の日まで、「先生、今までに習った曲、全部吹きたい！」と子どもから声が上がった。全曲続けて演奏し、「やった！楽しかった！」と満足そうな表情の子どもたちの姿がとても印象的だった。

自分の思いを表現するよさや喜びを感じてほしい、という思いで手立てを講じ、修正を重ね、日々の授業で実践してきた。教師の伴走の在り方とは、子どもの実態に寄り添い、授業を改善していくことだと子どもたちの姿から学んだ。これから先も、子どもたちの思いをくみ取り、自らの思いを表現することができる子どもを育てていきたい。